様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2012～2013
課題番号：２４８２０００４

研究課題名（和文）不定語と助詞によって構成される副詞の歴史的研究

研究課題名（英文）A historical study of adverbs composed of wh-words and particles

研究代表者
川瀬　卓（KAWASE, SUGURU）

弘前大学・人文学部・講師

研究者番号：８０６３４７２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,700,000円、（間接経費）　510,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は不定語と助詞によって構成される副詞の歴史的研究である。本研究の主な成果は次の通りである。（１）副詞の歴史的研究における課題と可能性について明らかにした。（２）「どうも」「どうやら」「どうぞ」「どうか」の歴史を記述した。また、それらの歴史的変化を言語変化の一般的傾向と関連付けることも行った。（３）不定語と助詞によって構成される副詞の歴史から見えてくる日本語史的問題を指摘した。
　以上のことから、今後の副詞研究の方向性に加え、副詞を視点とした日本語史研究の方向性も示せたといえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to investigate the historical development of adverbs composed of wh-words and particles. The following results were obtained: First, I clarified the problems and possibilities of a historical study of adverbs. Second, this survey demonstrated the historical development of a number of adverbs, for example domo, doyara, dozo and doka, and associated them with general tendencies in language change. Third, this investigation pointed out problems of Japanese language history from the perspective of the historical development of adverbs composed of wh-words and particles.
　These results indicate further directions not only for the study of adverbs, but also for the study of Japanese language history from the perspective of adverbs.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：副詞　不定語　助詞　日本語史　言語変化

１．研究開始当初の背景

副詞は、他品詞から文法的性質が変わることによって成立したものが多い。また、語彙的な意味の変化だけでなく、文法的な機能の変化も著しい。このことから、副詞は言語の動態、歴史的変化を捉えるうえで、恰好の材料になるといえる。

副詞の歴史的研究は、ある程度の蓄積があるとはいえ、まだ立ち遅れている現状にある。とくに、文法との関わりを意識した歴史的研究となると、それほど多くない。また、副詞の歴史的研究を通して、日本語史や言語変化などへの提言を目指す研究も、十分なされているとはいいがたい。副詞の歴史的研究をより豊かに実りあるものにしていくためには、語彙研究と文法研究の両方を見据えた研究、日本語史の中での位置付け、言語変化のあり方との関わりを意識した研究が必要である。

２．研究の目的

本研究は、不定語と助詞によって構成される副詞について個々の語の歴史的変化を明らかにするとともに、それによって日本語史や言語変化に関する新たな知見を見出すことを目的とする。

不定語とは「なに」「だれ」「どう」「いつ」「どこ」などの語である。このうち、「どう」が「も」「やら」「ぞ」「か」と結びついた「どうも」「どうやら」「どうぞ」「どうか」を具体的な考察対象として扱う。「どうも」「どうやら」「どうぞ」「どうか」は歴史的変化の結果、現代共通語において〈推定〉〈勧め〉〈依頼〉など、文の叙法性（文の述べ方、モダリティ）と関わる副詞になっている。これらは、個々の副詞の歴史的変化という点で興味深いだけでなく、日本語史上の問題や言語変化のあり方に対しても多くの示唆が得られる。

３．研究の方法

まず個別の副詞に関する歴史的変化の考察を行う。記述にあたっては、文献調査による実態の記述とそれに対する考察を基本とする。また、現代語における特徴をふまえて、それと別の時代語を対照させる史的対照という方法を取り入れる。本研究の調査資料は近世期のものが中心となる。近世後期においては上方語資料か江戸語資料かという点に注意を払い、地域差についても考慮する。各副詞の歴史は、共起する述語の語彙的意味、文の述べ方、文脈などに着目して明らかにする。

以上の考察によって得られた歴史をふまえた上で、それぞれの副詞に見られた変化がどのような言語変化であるかという点や、個別の副詞の歴史的位置付けについて考察を行う。

４．研究成果

本研究の主要な成果は以下の通りである。

(1) 副詞の歴史的研究における課題と可能性

これまでの副詞研究について流れを整理したうえで、副詞の動的性質に着目することの必要性を指摘し、歴史的変化を考察することの課題と可能性について述べた。

副詞の歴史的研究においては、個々の副詞の歴史的変化を記述・説明することと、それをより広い視野から捉え直すということが求められている。課題としては大きく次の三つに分けられる。①副詞の歴史的変化のありようを明らかにすること。②副詞を視点として日本語史を捉え直すこと。③副詞の歴史的変化から、言語変化一般に関する知見を得ること。以下、①から③について順に述べていく。

①副詞の歴史的変化

まずは、副詞化（副詞への転成）と副詞の変容（副詞の意味機能の変化）についての個別的考察の積み重ねが必要である。そのうえで、副詞の歴史的性質についての一般的考察を行わなければならない。個々の歴史から副詞一般の問題につなげるための観点として、次の四つが考えられる。

一つ目は語構成的な問題を視野にいれることである。たとえば、句が固定化して副詞化することや、前置き的、注釈的な従属節と副詞の連続性、語尾「と」「に」の有無と意味変化の関わりなどの問題について、今後検討していく必要がある。

二つ目は副詞が述語の文法カテゴリーとどう関わるかに注目することである。これによって、これまで述語中心で研究されてきた問題に光を当てられる。たとえば、文の叙法性について、述語形式の分析によって研究が進められ、歴史的研究においても優れた成果があげられているが、副詞の歴史的変化については、ほとんど扱われていない。しかし、叙法性の表現は、述語だけで表されるのではなく、副詞も関わりあう（例：どうやら風邪をひいてしまったようだ）。したがって、叙法性の理解には、副詞に注目した考察も必要であるといえよう。

三つ目は副詞の体系の再構築を目指すことである。副詞は体系化の難しい語群であるが、変化の方向性と適合するような共時的整理を試みることで、より妥当な体系化が可能になる。

四つ目は副詞の意味変化の類型を見出すことである。意味変化の類型を見出す試みはそれほど多くはなく、まだ考察の余地が大いに残されている。この問題は、副詞の問題としてだけでなく、一般的な言語変化の問題としても重要である。

②副詞から見た日本語史

また、これまで指摘されてきたことについて副詞を視点として見直すことで、日本語史研究がさらに進展すると考えられる。とくに、

個々の副詞の考察に必要な観点として①で示したもののうち、語構成的な問題を視野に入れること、副詞と述語形式の関わりを視野に入れることは、今後の日本語史研究において重要な視点になるだろう。たとえば、近代語の分析的傾向の内実を明らかにしていくことなどにつながると考えられる。

③副詞から見た言語変化
　さらに、副詞の歴史的変化を言語変化一般の問題として捉え直すことも必要である。ただし、理論化を急ぎすぎるあまり、歴史を説明するものとして妥当性が失われては意味がない。単なる理論のあてはめに陥らないよう、個々の歴史を丁寧に捉えたうえで、個別性を超えた普遍性を見出すことや、これまで述べられてきた理論に検証を加えることなどが求められる。

　以上、①～③で示したように、副詞の歴史的研究における射程はきわめて広い。
　なお、この成果については「５．主な発表論文等」の〔学会発表〕②としてまず公にし、次いで〔雑誌論文〕②として公表した。

(2) 「どうも」の歴史
　近世において「どうも」がどのように変化したのかを考察し、歴史の一端を明らかにした。具体的には〈感覚的描写〉（例：どうもおかしい）や〈推定〉（例：どうもパソコンが壊れているようだ）を表すようになる変化について論じた。
　もともと「どうも」は「話し手の期待の非実現」と関わるもので、近世前期上方語では〈不可能〉を表していた。近世後期上方語では用法の拡張が生じなかったが、近世後期江戸語では〈趨勢〉〈感覚的描写〉〈推定〉などを表すようになった。〈趨勢〉〈感覚的描写〉は、「どうも」が「話し手の期待の非実現」ではなく「話し手の期待通りでないことの生起」と関わると捉えられるようになったことによって派生した。〈推定〉はさらに後発の用法で、把握した事態の背後にある事情を見出すことによって〈感覚的描写〉から派生した。ただし、〈推定〉の本格的な発達は近代以降と思われる。
　また、以上の考察によって、言語変化について二点ほど貢献できた。一つは否定と言語変化の関わりについてである。「どうも」は、否定文を肯定的事態の非存在・不成立とみなすか、否定的事態の存在・成立とみなすかによって、意味用法の変化が起きた事例といえる。もう一つは、文法変化の一般性についてである。これまで主に述語部分について考察されてきた文法変化について、それが副詞の側にも起きることを具体的に指摘できた。
　なお、この成果については、「５．主な発表論文等」の〔学会発表〕①としてまず公にし、次いで大幅な加筆修正の上、〔雑誌論文〕①としてまとめた（掲載確定済）。

(3) 「どうやら」の歴史
　「どうやら」について、〈推定〉を表すようになる変化について考察した。
　「どうやら」はもともと、事態が漠然と感じられることを表す〈感覚的描写〉（意味的には現代共通語の「なんとなく」に近い）で用いられていた。これは現代共通語にはない用法である。近世後期になってはじめて、現代共通語のように、根拠から事態を推測する〈推定〉が生じたと考えられる。また、この変化の背景について、言語変化の一般性や形式の張り合い関係などの観点から論じた。

(4) 「どうぞ」「どうか」の歴史
　「どうぞ」「どうか」について、「どうぞ」が〈勧め〉を、「どうか」が〈依頼〉を表すようになる変化について考察した。
　「どうぞ」「どうか」は、現代共通語において、どちらも聞き手に行為を求める「行為指示」を表す。「どうぞ」「どうか」の違いは、行為によって誰が利益を受けるか（受益者が誰か）という点にある。すなわち、基本的には、「どうぞ」は聞き手利益である〈勧め〉（例：暑かったら、どうぞ窓を開けてください）を表し、「どうか」は話し手利益である〈依頼〉（例：どうか窓を開けてください。暑くて死にそうです）を表す。このような受益者による使い分けは、近代（明治期以降）に生じたようである。これは、配慮表現において前置き表現が発達することや、近代以降、行為指示において受益者による行為指示の表わし分けが重要になったことと関連すると思われる。

(5) 上記の副詞の日本語史的位置付け
　これまで述べてきた各副詞の歴史について、助詞の変遷との関連に注目して、日本語史上の位置付けを試みた。
　不定語の副詞（とくに「どうやら」「どうぞ」「どうか」）の成立は、係り結びの衰退という日本語文法史における大きな変化と関わっていると考えられる。係助詞の変容に伴って、「も」に加えて「やら」「ぞ」「か」も副助詞的な性格を獲得し、不定語と助詞が一語化した副詞の体系成立につながった。これは、文法史上の大きな変化が、語彙体系に影響を与えたということでもある。ただし、この点については大きな見通しが得られたに過ぎず、今後さらに調査、検討を進めていく必要がある。

　以上のことから、今後の副詞研究の方向性に加え、副詞を視点とした日本語史研究の方向性も示せたといえる。
　これらの研究成果をもとに、博士論文「日本語副詞の歴史的研究」を九州大学へ提出した。本論文は、序論、擬声語・擬態語の副詞を扱った第Ⅰ部、不定語と助詞が結びついて一語化した副詞を扱った第Ⅱ部、結語の４パ

ートで構成されている。序論、第Ⅱ部、結語に本研究課題の成果が盛り込まれている。本論文によって 2013 年 8 月に博士（文学）を授与され、さらに 2014 年 3 月に平成 25 年度九州大学大学院人文科学府長賞（大賞）を授与された。

(3)で述べた「どうやら」の歴史、(4)で述べた「どうぞ」「どうか」の歴史、(5)で述べた各副詞の日本語史的位置付けについては、さらに加筆修正を加えたうえで、雑誌論文として公表することを目指す。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 川瀬卓、近世における副詞「どうも」の展開、高山善行・青木博史・小柳智一編『日本語文法史研究２』ひつじ書房、2014 年 10 月刊行予定（掲載確定）、査読無

② 川瀬卓、副詞の歴史的研究における課題と可能性、『弘前大学国語国文学』第 34 号、pp.1-20（逆頁）、2013 年、弘前大学国語国文学会、査読無

〔学会発表〕（計２件）

① 川瀬卓、副詞「どうも」の史的変遷、日本語文法学会第 14 回大会、2013 年 12 月 1 日、於早稲田大学

② 川瀬卓、副詞の歴史的研究における課題と可能性、平成 24 年度（2012 年度）第 54 回弘前大学国語国文学会大会、2012 年 11 月 8 日、於弘前大学

〔図書〕（計０件）

６．研究組織

(1)研究代表者

川瀬　卓（KAWASE　SUGURU）
弘前大学・人文学部・講師
研究者番号：80634724